

塗長望気象局長の来日を機に、1957年5月から中国の気象資料を入手することが出来るようになったことは、われわれの記憶に新たなことと思います。その後1962年の気象学会総会で中国より学術使節団2名を約10日の日程で招待することを決議し来日を要請しましたが、日中両国間の政情の変化に伴い、1962年7月中国気象学会より招待の時期を延期してほしい旨連絡がありました。一方諸学界と中国との学術交流も、1955年秋に学術代表団を迎え日中間の学術交流も円滑に行われてゆくと思われましたが、その後日中間の交流を阻害する情勢は悪化し、諸学界ならびに日中両国民の強い要望にかかわらず両者の学術交流の道はほとんど断ち切られて来ましたが、しかし一昨年10月以来中国学術団招請の運動が関西の学術研究者の間に起り、また関東では昨年秋より日中友好協会を中心にこの運動が進み次第に全国的な運動に発展しました。本年1月には、日中友好協会と中国人民対外文化協会との間に『1963年度日中両国人民間の友好交流の実施に関する議定書』が調印され、この中に中国学術団の日本招請を実現させる取り決めが行われました。その後関東関西双方の連絡のもとに中国学術代表団招請の具体化が進展し、中国側から11月に張友漁氏を団長とする8分野10名からなる総合的学術代表団を派遣する旨過般訪中した日中友好協会学習活動家代表団に伝えられ、気象部門の学者1名の来日も決定しました。しかしその後来日する学者の過半の氏名は発表されませんでした。昨日気象部門の学者は顧震潮氏(中国地球物理学研究所気象担当教授)である由内報が届きました。氏はかつてRossbyのもとで仕事をされたことのある気象力学を専門とする学者ですが、気象事業全般にも通じ現在中国気象界の第一線で活躍されている方です。

今回の中国学術代表団の訪日予定を過般『天気』その他で11月上旬とお知らせしましたが、11月上旬に北京では人民代表大会があり、このため訪日は11月下旬に繰り下げてほしい旨連絡がありました。このため今秋東京で開催される気象学会昭和38年度秋季大会中に予定していた中国記念講演会は中止され、来日の際に別に機会をもうけ記念講演会が持たれる予定です。

同氏の来日中の日程は下記の通りです。

12月1日仙台

〃 3～8日東京

〃 9～10日名古屋

〃 12～19日関西

〃 21～22日広島

〃 23日 山口

〃 24日 福岡

顧震潮氏について

顧震潮(Koo Chen-chao)は現在、中国科学院地球物理研究所気象学担当教授で、年齢は40年代(50才未満)と推定される。中国の清華大学を卒業し、直ちに気象界で活躍をしている。中国の気象雑誌『気象学報』で最初に発表したのは、大陸性の規準についてである(1943年)。その後、突風頻度や気象要素の変動研究、低気圧の各種性質、気象力学とそれに伴う数値予報の研究、天気予報の統計的評価法、ラジオゾンデの空益やゾンデ観測の調査、量的予報や蒸発問題、雲と降水に関する物理学や人工降雨についての研究といったもので、その専門分野は極めて多彩である。特に、数値予報ではキーベル学校、チャーニー派の発展に務め、2～3パラメータのモデルや3層モデルの数値予報を扱っている。その他乱れの問題をも取り入れて数値予報の発展がはかられている。中国独特の問題であるチベット高原がシノプチックプロセスに及ぼす影響の研究では、ベンガル地方の偏西風南方分岐にあるトラフで、東チベットに暖気移流を起させ、そこに大気不安定の積乱雲を生ずることを論じている。

シノプチックの方では中国の寒波問題を論じ、これにはムルタノフスキー学派に属する方法を用い、ベースを用いて天気現象の予報をしている。

最近では雲や降水の現象に関する研究が多く、暖かい雲における雨滴の成長や上昇気流の変動や重力による雨滴の併合、及びこれの応用研究になる人工降雨へ研究をすすめている。

国際会議や国内会議にも出席していて、第8回 IUGG(国際測地・地球物理連合)(1948年?)、第1回国際数値予報会議(1952年、ストックホルム)に中国代表として出席、その他、共産圏科学者大会に訪ソしている。1958年10月に蘭州で全中国気象会議が開かれ、人工降雨についてのべ、最近では1962年8月、北京での中国気象学会創立38年を祝い、雲物理の観測と中国の雲物理学について、講演を行つている。

顧震潮氏は曾て、ストックホルムに外遊し、ロスビーのもとで理論気象学についての研究をしていた。英語、ロシア語には堪能なこともつけくわえておく。

(当舎記)